

# 野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

第 133 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会  
発行年月日 平成15年9月21日

ズグロカモメ



2003. 5. 20 石狩市八幡 撮影者 岸谷美恵子

〒063-0823 札幌市西区発寒3条1丁目1-5



も く じ

私の探鳥地 (46) 札幌市北区あいの里地区とその周辺  
 岩崎 孝博 ..... 2  
 石狩市の海岸で拾得されたシマクイナの弊死体について  
 平岡 考 ..... 3  
 胆振幌別川におけるシノリガモの繁殖例について  
 伴野俊夫・伴野美江・星川光子 ..... 4  
 狩猟と社会貢献と責務と 佐藤 春駅 ..... 7  
 前田一步園賞と北海道野鳥愛護会 ..... 8  
 探鳥会ほうこく ..... 9  
 探鳥会あんない ..... 15  
 鳥民だより ..... 16

私の探鳥地 (46) 札幌市北区あいの里地区とその周辺

岩崎 孝博

あいの里地区及びその周辺は茨戸川、石狩川、拓北地区の草原などに囲まれています。

一昨年の1月に望遠鏡を購入して以来、自宅近辺で単独鳥見を始めました。

①自宅から車で数分のところにあるあいの里公園：もともと足繁く通うあいの里公園は昭和60～62年に造成されました。面積12.2ha、周囲1km、中央にトンネウス沼を囲んだ公園です。トンネウス沼は雨水時貯留機能を持ち、茨戸川と水門でつながる旧河川で水深1m、ひょうたん型で水草が豊富なので小魚も多くいますし、希少なイトトンボが生息しハスの花も咲きました。あいの里公園が造成されてから16～17年たっていますが、種々の松やヤチダモ、サクラ、シラカバ等の広葉樹やツツジ、レンギョウの低木など

豊かな樹木が育ち、また湿地帯にはミズバショウも咲いています。雪解けとともに春の色彩が豊かになる頃、前後してアオサギやカモ類、まれにセイタカシギ、バン、カワセミなどの水域の鳥、アオジ、カワラヒワ、ウグイス、アリスイ、アカハラ、コヨシキリ、モズ、カッコウ、カラ類、まれにキレンジャクなどの陸域の鳥が飛来します。

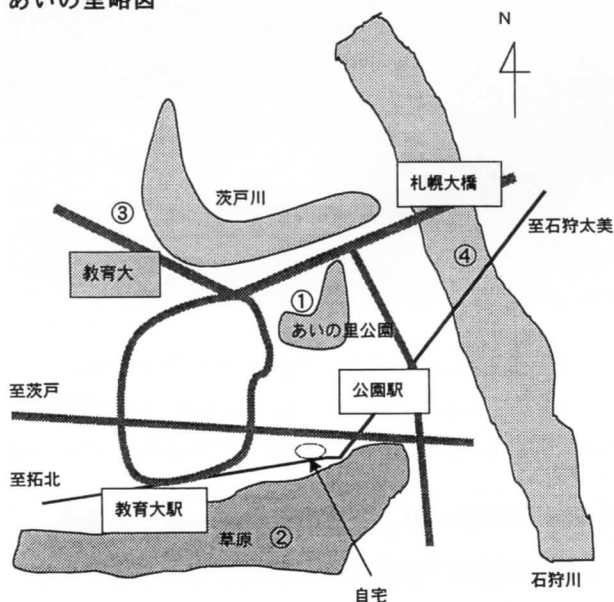
②自宅の周辺、町内の外回りを走っているJR線路の南東の雑草地や雑木林：ここでは、アカハラ、カワラヒワ、ハクセキレイ、オオジシギ、ウグイス、アリスイ、ヒバリ、オオジュリン、コヨシキリ、カッコウ、キジバト、アオジ、モズ、エゾセンニュウ、ノビタキ、ノゴマなど、通勤途上でも毎日のように見たり聴いたりできます。茨戸福移通り陸橋下でマキノセンニュウの鳴き声や近くの空き地でシマセンニュウの声を聴いたり、昨年気がつかなかった野鳥に会い大いに楽しんでます。

③あいの里公園から北西にある山口大師堂に隣接する茨戸川および雑草地：ここもお気に入りの場所で、コヨシキリ、ノビタキ、オオジュリンなど草原の鳥をじっくり観察できる場所でもあり、その他多種の野鳥を楽しめます。

④札幌大橋近辺の石狩川流域：ここは春秋にシギ、チドリ、カモ類ほか大いに楽しめる場所です。長期に観察することにより求愛、交尾、巣作り、抱卵、子育て、巣立ちなど様々な場面に出会い一層野鳥の生活に興味が深まりました。

草原②も宅地開発が今年から着工され、自然の減少に心配していますが、鳥たちが力強く生きてほしいと念じています。今後も継続してこの地域の野鳥を観察、見守って行きたいと思っています。

あいの里略図



〒002-8071 札幌市北区あいの里1条7丁目12-7

## 石狩市の海岸で拾得されたシマクイナの弊死体について

平岡 考 (山階鳥類研究所)

2002年4月に石狩市の海岸で拾得されたシマクイナの弊死体を同市在住の黒田晶子さんから山階鳥類研究所に寄贈いただきました。本種は生息状況等に不明の点が多く、この拾得記録は貴重なものと思われまますので、この鳥体について報告します。

●山階鳥研受入番号：2002-0183、採集日：2002年4月22日、採集地：北海道石狩市親船町、採集状況：海岸の砂丘にて死体拾得、採集者：黒田晶子。●形態的特徴：全身褐色と黒色と白のまだら。頭頂から体上面は黒と褐色の縦斑で、上背の前部と頭頂には白点を欠くが、後頭には細かい白点があり、上背の後半より後ろの体上面全体には細く白い横斑がある。顔は全体に黒褐色で不明瞭な幅広い淡色の眉斑がある。眉斑の後方および喉の側面に細かい白点がある。腮・喉は白く、胸は淡褐色・淡灰色・白の横斑である。胸側は黒地に細かい褐色縦斑があり細かい白点がある。脇は黒と褐色の縦斑で細い白色の横斑がある。腹の中央は白い。尾羽と下尾筒は黒く、細く白い横斑がある。雨覆は黒ないし暗灰色地に褐色縦斑と細い白い横斑がある。初列風切は灰色。次列風切は白いが、外側数枚は多少とも灰色、内側（三列風切）は雨覆と同様の色彩で、ほぼ完全に白なのは中央の3枚である。●裸出部の色彩（4月25日山階鳥研受入時）：脚は濃い肉色、上嘴の全体と下嘴の先端は暗褐色、下嘴の基部は肉色。虹彩色は、受入れ時、眼球が落ちくぼんでいたため正確には不明だが暗色であった。●測定値：（嘴峰長）11.4mm、（自然翼長）78.7mm、（最大翼長）81.5mm、（尾長）34.0mm、（ふ蹠長）23.5mm。●体重（4月25日山階鳥研受入時）：41g（多少乾燥が始まっており死亡時の体重よりやや少ない値と考えられる）●性別：雌（左卵巣9.5x4mm）●死体の状態：羽毛は乾燥しており、乱

れはなく極めて整っていた。山階鳥研での受入時には眼球が落ちくぼんでおり、死体（組織）の乾燥が多少始まっていたが、腐敗はしておらず全体に新鮮で良好であった。

この個体は測定値、全体の形態と色彩、ことに次列風切に白色部のあることから、シマクイナと識別できます。

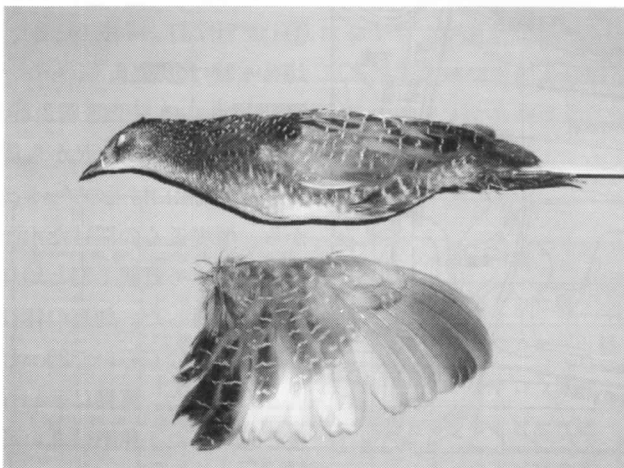
この個体については、北海道新聞2002年5月21日付石狩当別版に「環境省指定絶滅危ぐ種『シマクイナ』力尽く」として写真入りで報道されましたが、石狩鳥類研究会の「石狩鳥報2002」では、他地域で死んだものが漂着した可能性もあるとして、石狩の鳥とすべきかどうか検討の必要があるとされました。しかし、もしも漂着であった場合、羽毛は海水によって乱れてべっとりとして体にへばりついて、しかも砂まみれになっているはずで、本個体は上述のように極めて良好な状態でしたので、漂着の可能性はまったくなく、当地に渡来し落鳥したものと考えて問題ないと思います。

シマクイナは、日本鳥学会（2000）の「日本鳥類目録（改訂第6版）」によれば、本州以南では少ない冬鳥、北海道では少ない旅鳥です。繁殖地はロシア極東のトランスバイカリア、ウスリー地方、中国東北部で、越冬地は日本のほか、中国東部と朝鮮半島です。本種は、環境省（2002）の「日本の絶滅のおそれのある野生動物（レッドデータブック）鳥類」では絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。同書によれば、観察例は少なく生息状況はほとんどわかっていません。今回の個体は季節的に、拾得地より南のどこかで越冬していた個体が春の渡りの途上に死亡したものと考えられ、本種の新たな分布情報として貴重なものと思います。

この個体は、研究用剥製標本に作成され山階鳥研に保管されています。右翼は切り離して広げた標本としました。また、DNA分析のための組織サンプルも採取して保存しています。なお、本種は、北米大陸で繁殖するものと同種とされる場合と別種とされる場合があり、同種の場合の学名は *Coturnicops noveboracensis*、別種の場合、日本にいるものは *Coturnicops exquisitus* となります。また属名も *Porzana* とされる場合もあり、ご覧になる本によって違う学名が書いてある場合がありますので、注意が必要です。

末筆になりましたが、貴重な拾得鳥体をご寄贈いただきました黒田晶子さん、ならびにこの報告を書く機会を与えていただきました樋口孝城さんに感謝いたします。

〒270-1145 我孫子市高野山115 山階鳥類研究所



# 胆振幌別川におけるシノリガモの繁殖例について

伴野俊夫・伴野美江・星川光子

## 1 はじめに

シノリガモは全長約42cm、翼開長約66cmでカモ目カモ科に属し、環境庁のレッドリストでは、絶滅のおそれのある地域個体群（地域的に孤立している個体群で絶滅のおそれの高いもの）に、北海道のレッドリストでは、希少種（存続基盤が脆弱な種または亜種）にランクされている。

このシノリガモは冬期、九州以北の岩礁の多い海岸に見られ、春になると多くは北へ渡り去り、一部は青森県など東北地方の溪流で繁殖していることが報告されている（佐藤ほか1988）。東北地方で繁殖していることから北海道でもその可能性は高いと思われる、道内の情報として、「十勝川上流部で雛連れの雌の確認」（芳賀1979、藤巻2000からの引用による）や「道民の森で繁殖が確認されたとの伝聞的記事」（北海道野鳥愛護会2001）、「シノリガモの繁殖情報もある」（奥尻島関連のウェブサイト）程度で、繁殖状況の詳細な報告は見あたらない。

筆者等は、1995年（平成7年）に北海道登別市の胆振幌別川においてシノリガモの繁殖を確認したので写真を添えて報告する。

## 2 発見の経緯と生息地の環境

筆者の伴野俊夫、伴野美江は1992年頃より登別市を中心に野鳥の観察を続けてきた。今回シノリガモの繁殖を確認した胆振幌別川もフィールドの一つで、河口から約5km上流にある胆振幌別川砂防ダム（東経140°04′北緯42°27′）の背後にダムによってできた池（以下は「池」と記述）が

あり、そこでは5月から6月ごろに様々な水鳥が見られ、定期的に観察していた。

1995年6月11日に、シノリガモのつがい1組が左岸の石上で休んだり水面を泳いだりしているのを確認した。その後、7月7日に伴野美江と星川光子はシノリガモ雌親（以下は「雌親」と記述）とシノリガモ幼鳥（以下は「幼鳥」と記述）4羽を発見した。なお、これらは同時に見られたことから、両者の関係は親子と判断した。

シノリガモが繁殖していた場所は、前述のダム（堰堤幅130m）背後の池及びその上流域（図1）で、幅約85m、長さ約270mあり、この池に本流が早瀬となって流れ込んでいる。右岸は川岸沿いの道路と牧草地があり、ダムの堰堤近くの沢から、カムイヌプリを水源とする小さな支流が流れ込んでいる。この支流は水深が浅く、ササやヤナギ、イタドリなどのブッシュに覆われている。左岸は高さ約50mの切り立った断崖に広葉樹が張り付くように茂っている。水際は崖から崩れた岩石と広葉樹やイタドリ、ササ、水草などが川縁に覆いかぶさり、幼鳥が隠れるのに適した環境である。

なお、1995年8月にシノリガモ採餌域の水生昆虫を調査したところ、フタスジモンカゲロウやニンギョウトビケラなどの6種（表1）を確認した。

## 3 観察状況

1995年7月7日に幼鳥を確認してから8月15日まで、双眼鏡と望遠鏡、カメラ、ビデオを用いて右岸から定点観察した。

その主な生態等は次のとおりである。

① 7月7日 雌成鳥1羽、幼鳥4羽（金曜日、くもり、観察時刻14:40、16:00~18:00）

14:40、右岸の小沢から流入する支流出口付近のブッシュから、堰堤近くの開けた水面にシノリガモ雌親1羽と幼鳥4羽を発見した。幼鳥の体長は雌親の半分ぐらいで20cm程度と思われた。翼長は8cm程度と思われた。体形は丸い形だった。目から首および胸か

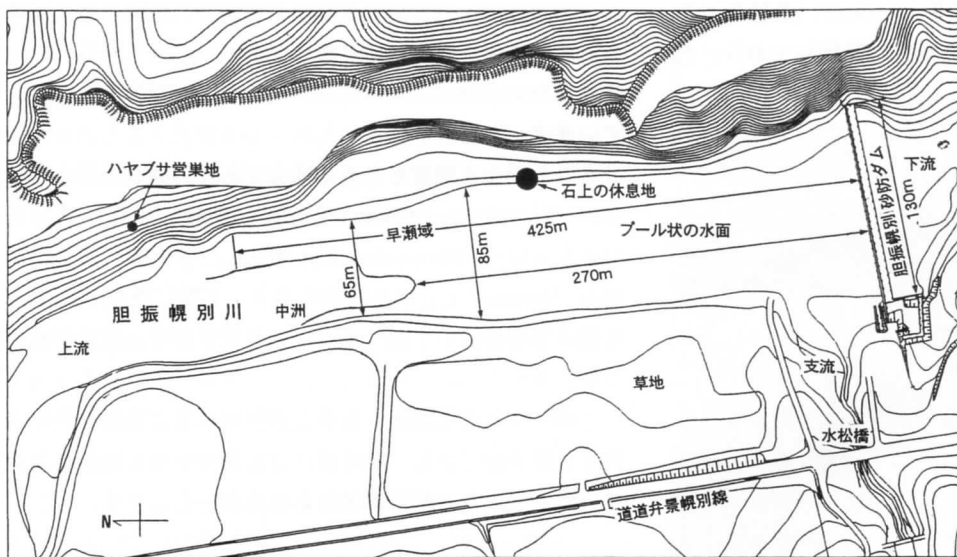


図1 シノリガモ繁殖地周辺地図

ら下部の色彩は白色で、額および頭頂部付近から上背面および腰部は灰黒褐色だった。幼鳥は流れの緩やかな堰堤付近の水面を右岸から左岸へ堰堤と平行して移動した。幼鳥が急いで移動する時には立ち上がるように体を起こして飛沫をたてながら水面を走るように素早く移動した。

16:00~18:00、親子は本流流入域を上流に向かって遡上していたが、急に反転して幼鳥が下流の池へ逃げる様に移動した。雌親は上流方向を頻繁に見回して警戒しながら幼鳥の後を追って行った。その後、幼鳥は右岸の浅瀬で連続的に水中に首を突っ込んで採食した。雌親は常にほぼ一定のピッチでグワッグワッ(図2)と鳴き声を発しながら首を伸ばして周囲を見張っていた。4羽の幼鳥は雌親から2m程度以内の近いところで採食していた。間もなく、採食をやめて池の右岸から左岸に向かって横断し始めた。幼鳥は先を競うようにして移動し、遅れて距離が離れると体を起こして水上を走る様にして飛沫を立てながら急速に追いつき、追い越す滑稽な動作を繰り返した。雌親は一番最後から幼鳥について行った。

② 7月14日 ♀成鳥1羽、幼鳥4羽(金曜日、くもり、観察時刻5:00~18:00)

5:15、右岸支流流入部の浅瀬で幼鳥が断続的に水中に首を突っ込んで採食した。雌親は幼鳥の近くで、首を伸ばして周囲を見回して警戒している様子だった。

6:00~6:28、池の中央部を直線的に横断して左岸上流域の岸縁まで移動した。さらに、砂利の岸縁に沿って左岸から右岸へ移動しながら雌親が3回潜った。

6:28~6:38、雌親が1分程度の間隔で8回潜った。水中では水底の石の下側を嘴で探るしぐさを繰り返した。水中に潜っている時間は30秒以下だった。

6:38~9:00、親子が移動と潜りを繰り返し、時々幼鳥が岸縁で採食して動き回った後、左岸に隠れた。幼鳥の潜水時間は3秒以下だった。

13:00~14:00、左岸の石上で動かない。

③ 7月16日 ♀成鳥1羽、幼鳥4羽(日曜日、くもり、観察時刻8:00~9:00、16:20~17:30)

8:00~9:00、左岸の断崖にはハヤブサが生息しており、シノリガモが採食場に行っている本流早瀬域の川岸から10m程度離れた樹木に巣立ったばかりのハヤブサの幼鳥がしが

みついていた。まだ、飛ぶこともままならず、樹木直下の2m位まで人が近寄っても逃げなかった。間もなくハヤブサの親鳥が捕獲した野鳥をむしって口うつしで幼鳥に食べさせた。この間、シノリガモ親子は池の上流側にいたが、ハヤブサに襲われることなく共存していた。



シノリガモの親子 1995年7月22日撮影

16:24、雌親と幼鳥が泳いでいたが釣り人8名が来ると、親子は直ちに左岸の石上へ移動して動かない。

④ 7月17日 (月曜日、晴れ、観察時間帯5:50~7:20)

5:50、早朝から犬を放して遊ばせた人が帰った。その後、7:20まで観察していたが、親子は全く現れない。

⑤ 7月18日 ♀成鳥1羽、幼鳥4羽(火曜日、晴れ、観察時刻5:30~7:20、10:20~17:20断続)

5:30~7:20、釣り人が5名いた。シノリガモは現れない。

10:30と11:55~12:30、釣り人1名いた。シノリガモ親子は左岸の石上で動かない。

15:35、シノリガモ親子は左岸の石上で動かない。

16:17~17:20、シノリガモ親子は本流の早瀬へ移動した。幼鳥の体長は雌親の80%程度の大きさと思われた。

⑥ 7月20日 ♀成鳥1羽、幼鳥4羽(木曜日、晴れ、観察時刻5:00~7:20)

5:00~7:20、幼鳥の体長は雌親と同じくらいに見えた。幼鳥の潜水時間は約25秒程度だった。

⑦ 7月21日 ♀成鳥1羽、幼鳥4羽(金曜日、晴れ、観察時刻5:20~19:05)

5:20~10:50、右岸から左岸へ移動し、石の上で雌親と幼鳥ともに羽繕いした。シノリガモ親子の前をカルガモの親子が下流から上流へ通過したがシノリガモは何の反応も見せない。その後、シノリガモ幼鳥は石上に座ったまま動かない。雌親は常に辺りを見回している。

10:50~11:15、堰堤まで

表-1 シノリガモ生息域で確認した水生昆虫

目	科	属	種
カゲロウ目	モンカゲロウ科	モンカゲロウ属	フタスジモンカゲロウ
〃	ヒラタカゲロウ科	タニガワカゲロウ属	キブネタニガワカゲロウ
〃	フタオカゲロウ科	オオタニガワカゲロウ属	オオタニガワカゲロウ属の一種
〃	トビイロカゲロウ科	トビイロカゲロウ属	トビイロカゲロウ属の一種
トビケラ目	カクツツトビケラ科	コカクツツトビケラ属	コカクツツトビケラ属の一種
〃	エグリトビケラ科	ニンギョウトビケラ属	ニンギョウトビケラ

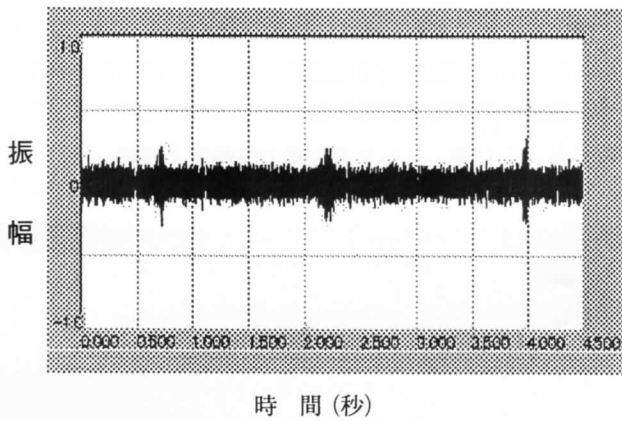


図-2 雌親が定常的に発する低ピッチの鳴き声

泳いで行って幼鳥が採食し、雌親は周囲を警戒していた。その後、左岸石上へ戻った。この間に幼鳥が潜る際には水面より上へ少し跳ね上がって勢いをつけて水中へ潜った。

17:00~18:30、シノリガモ親子は本流の早瀬へ向かったが、釣り人いたので、早瀬入り口付近を行ったり来たりしていた。幼鳥は水面で首を前後に振りながら泳いで移動していた。

18:30~19:05、幼鳥は池の右岸上流域の浅瀬で採食し始めた。雌親は首を伸ばして周囲を警戒していた。

⑧ 7月22日 ♀成鳥1羽、幼鳥3羽(土曜日、くもり、観察時刻6:10~18:00)

17:30~18:00、池の右岸上流で雌親が周囲を警戒し、幼鳥3羽が盛んに潜っていた。幼鳥1羽が見えない。幼鳥の胸は黒灰色に黒ずんで、雌親と同じ様な色合いになって来た。雌親が誘導するような感じで先頭になって本流の早瀬へ向かい、幼鳥は雌親の後について行った。

17:37、本流の早瀬域に差し掛かったところで、急に反転して下った。池上流右岸の浅瀬で雌親が周囲を警戒する中で、幼鳥は採食を始めた。

17:45、幼鳥が何度も繰り返して潜り始めると、周囲を警戒していた雌親も頻繁に潜り始めた。水中では石の下側に嘴を差し込んで食べているようだった。

17:50、雌親がチョチョチョンと乱れたリズムの警戒音の様変わった声(図3)を出した。すると、幼鳥は一斉に左岸の対岸へ逃げ去った。その後、雌親は上流を警戒しながら本流の早瀬域まで上っていった。

⑨ 7月23日 ♀成鳥1羽、幼鳥3羽(日曜日、くもり一時雨、観察時刻18:30~19:30)

18:30、突然に、何処から来たのか、幼鳥を確認後に初めて現れた雄成鳥(A)が鳴きながら池中央に飛来した。雌親と幼鳥はすぐに近寄って行って2m位まで近づいたところで雄成鳥(A)が逆方向に離れ去った。この間、両者は鳴き声を交わすこともなく、親子から逃れるように別々に離れた。

18:30~19:20、池上流部で親子がかたまっていたが、間

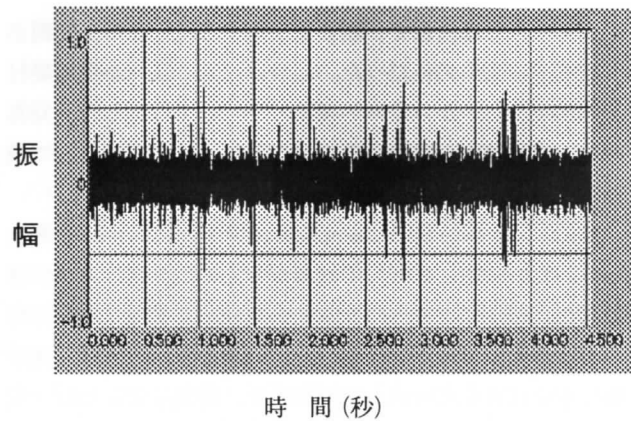


図-3 雌親が緊急退避を促す鳴き声

もなく雌親は先頭になって本流の早瀬へ向かったが、途中で下流の池の方へ戻った。

19:20~19:30、辺りが暗くなってビデオ撮影が困難になったが、雌親が先頭になって本流の早瀬を上っていった。

⑩ 7月26日 ♀成鳥1羽、幼鳥1羽(水曜日、霧、観察時刻6:30~7:00)

6:30~7:00、幼鳥2羽がいなくなり、雌親と幼鳥1羽のみしか確認できない。

⑪ 7月21日にシノリガモが休息する対岸の石の近くでキツネを見かけてから5日の間に、幼鳥が急減し、7月21日に4羽いた幼鳥が今日は1羽しか確認できなかった。3羽の幼鳥たちはキツネに襲われた可能性が高いと思われる。

⑫ 7月29日 ♀成鳥1羽、幼鳥1羽(土曜日、くもり、観察時刻7:30~8:10、17:00~18:30)

7:30~8:10、池を上流に向かったが反転して左岸の石上にあがって動かない。

17:00~18:30 何処かから別の雌成鳥1羽が飛来して堰堤の上で羽繕いしていた。

⑬ 7月30日 ♀成鳥1羽、幼鳥1羽(日曜日、雨、観察時刻12:50~18:10)

12:50~13:10、池左岸に親子各1羽のみ確認した。

17:40~18:10 他から飛来してきた雌成鳥(B)が堰堤上で頻繁に羽繕いしていた。その後、繁殖中の親子が池の右岸中央部から堰堤付近に近寄ってきた。すると、その雌成鳥(B)は水面に泳ぎ出て行き、潜って池中の親子に接近して1m以内の所に浮き上がった。しかし、直ぐに分かれて、雌成鳥(B)は堰堤の上に戻って、両者別々になった。

⑭ 8月2日以降

8月2日、5日、6日、9日、15日に調査したが、雌親も幼鳥も確認できなかった。

#### 4 考察

胆振幌別川でシノリガモが繁殖できた要因を推測してみると、

- ① 雨量の多い時期で、常に堰堤上面まで水位が安定しており、河岸植物が水面を覆ってシノリガモが隠れる待避エリアが確保されていたこと。
- ② 池に流入する支流や本流の池と接する流域に、幼鳥が採食できる浅い早瀬があったこと。
- ③ 活発に採食する朝夕の暗い時に人が少なかったこと。
- ④ 繁殖期は、当地では雨や濃霧の日が多いため、訪れる人が少なく、視界も悪かったために外敵から見つかりにくかったこと。

などが考えられ、安心して抱卵し、休息できる場所と採食できる環境が隣接して存在したことによるものと思われる。

## 5 終わりに

1992年頃に繁殖地周辺で砂利採取が行われた。その際、池や川を覆っていた広葉樹やブッシュが刈られ、川底の石が消失して自然環境が大きく変化した。1995年に胆振幌別川でシノリガモの繁殖を確認したところであるが、以前に比べて負荷の大きい中で辛うじて繁殖したものと思われる。

その後2001年に、繁殖域の堰堤に魚道が作られた際に堰堤中断の排水孔が塞がれたため、池の水位が堰堤上面以下に低下することがなく、渇水期でも安定した水位が保たれるようになった。この状態で河岸植生が安定し、シノリガモが身を潜めて採食し、休息する岩場での安全が確保されると、再び繁殖することが期待できると考えている。

なお、1999年5月8日と2000年5月14日に、幌別川上流の鉾山町地区でつがいと思われるシノリガモの雌雄を確認

したが、幼鳥は確認できなかった。

本稿の作成にあたり、北海道環境生活課の長尾康氏には筆者らにこのまとめをすることを勧めていただくとともに、査読していただいた。北海道野鳥愛護会の樋口孝城氏には北海道における繁殖状況をご教示いただいた。(株)野生生物総合研究所の酒井健司氏及び登別サケマス孵化場の堀本宏氏には水生昆虫の調査及び種の同定をしていただいた。ここに深く感謝するとともに御礼申し上げます。

## <参考文献>

- 佐藤広巳、小湊郁夫、清棲幸保(1988)：栗駒山麓一泊川におけるシノリガモの繁殖とその生態、Strix 8：159-176.
- 芳賀良一(1979)：富村発電所建設の事後生態調査、河川流域の哺乳類及び鳥類、十勝川水系上流地域の生態調査報告：57-88.
- 藤巻裕蔵(2000)：北海道鳥類目録改訂2版、帯広畜産大学動物管理学研究室、pp10.
- 北海道野鳥愛護会(2001)：探鳥地紹介「道民の森」、北海道野鳥だより123号：2-3.

伴野俊夫・伴野美江

〒059-0015 登別市新川町4丁目1-28

星川 光子

〒059-0015 登別市新川町4丁目7-1

# 狩猟と社会貢献と責務と

北海道猟友会 佐藤春 駅

野鳥愛護会の皆様こんにちは。この度は愛護会の団体委員の一員として原稿の依頼がありましたので、この機会に猟友会の実情の一端をご紹介します、ご理解を頂ければと思います。寄稿させて頂きました。

始めに、北海道猟友会の設立は昭和9年に始まり、昭和42年に知事から法人の認可を得て現在に至っています。

さて、狩猟の「狩」と言う字は「獣」を守ると書くように、狩猟とは山野でむやみに動物を捕獲するのではなく、大自然において野生鳥獣との共生を図りながら、増え過ぎた鳥獣の個体数を適正なレベルに保つという、循環型の生態系を維持するために重要な役割を担っています。また、狩猟は絶滅の危険性のない鳥獣を対象として、法律で定められた一定の制限の中でルールとマナーを遵守して、捕獲と有効活用を図るという自然資源の利用であり、「自然の保全」にもなっているものと考えております。

近年の狩猟の問題としては、昭和60年以降に見られるように、当初は道東地域に始まったエゾシカの激増とそれに伴う農林業被害でしたが、現在はシカの数や被害ともに全道に拡大していることから、その被害対策として、道による「エゾシカ保護管理計画」の策定と実施が進行しています。しかし、狩猟用の銃弾の流通面からは、当初は散弾及びライフル弾ともに国内の在庫は鉛弾が主で銅弾等の代替弾の量が不十分という状態であったこと、また、捕獲物の残滓の回収箱等の設置箇所数や焼却施設も極端に少ない状況であったが(現在も変わっていない)、道としては、農林業被害の現状からは緊急の対策として、シカの生息数減を対象とした可猟地域の拡大と1日当たりの捕獲頭数の増加を図る等の管理計画を先行して進める必要があったためとは言え、狩猟や個体数調整に協力しているハンターにとっては、この取り扱いが大きな負担であり課題となって

います。

シカ猟においては、山の中で捕獲した獲物の一次処理(放血や内蔵の処理)をすることは、肉質と鮮度維持を保ちながら有効活用を図る点からは重要な作業ですが、その際に出る残滓をビニール袋に入れて持ち帰るように会員に指導していますが、道内の大半の市町村では残滓を生ゴミとして扱っては頂けないため大変に困っている状態にあり、その辺を解決しないと個体数管理も協力しづらくなるため、解決策を早く行政が出すべきと思っています。

しかし、ワシ類の鉛中毒が発生していることに対しては、猟友会としても大変に責任を感じており、愛護会や道民の皆様にも申し訳なく、会員に対するより一層の銅弾使用の徹底を図るよう指導の強化を図ってまいります。なお、鉛弾の規制は全国でも北海道だけのため、本州での銅弾の販売や流通量は少なく、また、銅弾に対する知識も乏しく、北海道へ短期間の日程で来るために経費を掛けて、わざわざ銅弾でのサイト合せ(スコープ調整)を行ってくる者も少ないようです。道内においてもヒグマに対する銅ライフル弾の威力や与えるダメージに不安と身の危険を感じることから、現行はヒグマに対して鉛弾使用が可とされているので、この点にかこつけて鉛弾を所持するだけでなくシカ猟にも使用する者もいるため、この辺が鉛中毒問題の一因

ともなっている。ちなみに道内で狩猟をする者は猟友会員が約7,200名、アウトサイダーは500名前後で道外者は約2,700名程です。今後は行政の協力を得て銅弾等の代替弾の改良を早期に進めて頂くよう猟銃の業界に働きかけて頂くとともに、安全と安心のできる狩猟が出来るよう、より一層の指導を強く感じているところです。

次に、私たち狩猟者は単なる鳥獣の捕獲者ではなく、鳥獣の保護管理の担い手として、農林業被害の防除や街中でのキツネ、アライグマ、カラス等の有害鳥獣捕獲及び自然環境や鳥獣関係の各種調査に必要な情報や資料提供等に協力するなど、環境のモニターとしても大いに社会に貢献してまいりたく感じています。

終わりにになりましたが、猟友会では昨年「狩猟・猟友会のイメージアップを図ろう」ということで、狩猟者の自らの意識や行動を変えていこう、との呼び掛けを展開しております。まだ、運動を始めたばかりではありますが、狩猟に対する野鳥愛護会と一般道民の理解を得るよう、また、人と鳥獣との共生の推進を深めるよう一層の努力をしてまいりますので、会員の一人として今後も皆様方のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

〒060-0806 札幌市北区北6条西6丁目

第2山崎ビル3階

## 前田一步園賞と北海道野鳥愛護会

前田一步園財団が設立の記念誌として発行した「前田一步園財団20年の歩み」の中で、「前田一步園賞」を第1回目の昭和58年、そして平成13年の2度受賞した北海道野鳥愛護会が次のように紹介されている。

前田一步園財団の数ある目的事業のなかで、新聞などに報道され一般に最もよく知られているのが「前田一步園賞」だ。豊かな自然が残る北海道とはいえ、人の営みは環境に負荷をかけ、放置すれば取り返しのつかない荒廃へ進む。危機を憂える識者、研究者、活動家、カメラマンらの訴えに社会が反応し始め、行政の意識も開発一辺倒から大きく変わってきた。粘り強く心優しい人々が、進んで山中や公園、河川のゴミを拾い、木道整備に汗を流し、希少動植物を我が子のように守る。観光客や登山者にも節度ある行動を求めて、自然の魅力を末永く保とうと力を尽くす。地場産業や生活と厳しい調整を経て共存の道を探り当てた運動、子供たちや地域の人々をパトロールや植樹活動へ組織し、環境を大切にすることを育てた運動もある。一步園賞はこれらの地道な営みを称揚し励ます一方、活動内容を一般に知っ

てもらふことで自然保護思想を広めて来た。

財団設立の昭和58年(1983)、第1回として北海道野鳥愛護会とマリモ保護に貢献した紅林晃氏(江別市)を表彰して以来、第20回の平成14年(2002)のERIMO・SEAL・CLUB(エリモ・シール・クラブ)、雨竜沼湿原を愛する会まで、合わせて19団体と19個人を顕彰した。巻末の事業実績目録に全受賞団体・個人名と業績を掲載したが、活動の一端は次の具体例に見ることができる。

### 野鳥の王国を定点観測

#### 第1回・昭和58年

##### 北海道野鳥愛護会(札幌市)

自然保護運動が道内でも高まりを見せた昭和45年(1970)に設立された。当時、道内に日本野鳥の会支部や各種の野鳥愛護団体、愛好者・研究者が散在したが、横断的な指導組織の必要を感じた道が「全道の野鳥愛好者の連絡組織」として、各種の情報交換や、資料と研究の場を提供し、一面において鳥獣保護思想を普及するための指導者を養成しよ



う」と動物学の権威、犬飼哲夫・北大名誉教授を会長に、道庁内に事務局を置いて設立した。設立会員は個人212名、9団体。その後次第に親離れし事務局も道庁を離れた。現在は会員数400を超える。本州在住者もいる。年会費2,000円で、おおむね年25回の探鳥会と、年4回の「北海道野鳥だより」発行およびホームページ運営が主な活動だ。設立30周年を迎え、平成13年には記念誌「私たちの探鳥会」を刊行した。一歩園賞から18年を経て新たに財団から40万円の助成を得て実現したものだ。「野鳥だより」と記念誌に記載されている30年の観察記録は学術的にも貴重な資料と言われる。

探鳥会はたまに道内でも遠方に泊まりがけで足を伸ばすことがあるが、札幌から日帰り圏にある「野鳥観察の名所」には毎年ほぼ同じ季節に訪れる。定点観測だからこそ変化を的確に捉えることが可能だ。記念誌に暦年の詳細記録を載せている観測点は野幌森林公園、札幌市福移、藤の沢、円山公園、東米里、平和の滝、近郊のウトナイ湖、植苗、千歳川、鶴川河口、小樽港、美唄市宮島沼の12カ所。第5代会長のフクロウの画家、谷口一芳氏は昭和23年、28年に「札幌市中心部の知事公館、植物園でフクロウとカラスの空中戦を目撃したり、フクロウの幼鳥のスケッチをした」そうだ。同じく設立会員で平成14年に第6代会長になった

小堀煌治氏は「カッコウも昔は札幌では普通の鳥でしたが、近頃は郊外でもめったに声を聞けない。一番減ったのは草原の鳥でしょう。草原がみな宅地に商業地にと変わってしまったのですから。その代わり人里近くに住むムクドリやキジバトは増えている。道内ではまれな鳥だったダイサギ、コサギ、ゴイサギ、カワウといった水辺の鳥をよく見るようになったのは、環境悪化した本州を逃げ出したのでしょうか」と大きな変化を語る。

第4代会長の柳澤信雄氏は「バードウォッチングは自然に対する基本的なマナーを学ぶ最良の手段」と言う。何より、野鳥を脅かさないように気を遣う。森の奥まで車で乗り込むとか、大勢で騒々しく歩くことはしない。探鳥会ではカメラでなく三脚付きのスコープや双眼鏡で一心に鳥影を追う。それだけに、水鳥が集まる池の周辺に打ち捨てられたカモの羽や頭部を、自然林の藪の中に家電、家具、タイヤなどのゴミの山を発見した会員は、心無い行為を怒り悲しむ。営巣地を踏み荒らして省みない無節操な撮影者に遭遇して、やりあうこともある。しかし〇〇反対、××阻止といった運動に会として取り組むことはしていない。一方で「野鳥を愛する」一点で結びついた多様な人々が、各々の考えに従って行動し、各地・各種の自然保護運動の核になっていることも少なくない。



## 初めて野幌探鳥会に 参加して

2003. 5. 4

今野成捷

今まで冬の暖かい日に、歩くスキーに来て、高い木の上で日なたぼっこをしているフクロウや森の中で木をついているクマゲラを見たり、ビジターセンターに寄って、ガラス越しにエサを食べに来ている野鳥を見て色々な鳥の名前を覚えられたら良いなと思い、参加させていただきました。

「あっ!!カワラヒワがいる」とか「ニューナイズメがいる」というので、一生懸命に双眼鏡を、あやつるのですが、なにせ鳥の動きが素早くとともとらえられなく、やっと焦点が合ったと思ったつかの間、すぐどこかへ飛んで行ってしまふ。

そんな繰り返しの中で、参加者の会話の中にオオルリとか、カワセミに出会った話しを楽しげにしているのを聞き、名前だけは知っていましたが、こんな身近な森に生息をしているのを知り、びっくりしました。あちらこちらからいろんな鳴声が、こだまして聞こえて、言葉では言い現せな

い幸せな気分になりました。

やはり名前を知りたい、でも素早い、そんな時に行く先の散歩路においてエサをついばんでいる小さな鳥、「こちらへいらっしゃい」とでも言うように先へ先へと「チョコ、チョコと歩いて行くのがアオジです」と教えられ、何度も現われて、じっくり観察する事が出来ました。次に路のすぐそばの斜めの木にヤマゲラが巣穴であろう一生懸命にほっているのに出会いました。

多勢で見ているのにも脇き目も振らず、足と尾羽で身体をささえ、コンコンと二度三度ついて木くずをとばしてほうり投げているのを見ると、とても感動いたしました。鳥だけでなく、水芭蕉や小さなすみれ、エゾノリュウキンカなど、春満載の野幌に改めて親しみを覚えました。また灌漑用の池の水が無くなりマガモやその他の水鳥が激減している実態を聞かされ、自然が失われつつあるのを実感しながら、今回2種類の野鳥を知り得た事に、満足した一日でした。ありがとうございました。

〒060-0010 札幌市中央区北10条西15丁目1-6-704

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、オオタカ、コガモ、マガモ、キジバト、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キクイタダキ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴ

ジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、イカル、ニュウナイスズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、キクイタダキ 以上 39種

【参加者】飯田信義・セツ子、井上公雄、大賀 浩、大槻日出、岡田幹夫、岡山 壯、香川 稔、片寄慎司・益子、嘉藤、蒲澤鉄太郎・則子、亀井厚子、久志本アイ、後藤義民、小山久一、今野成捷・ヒロ子、斎藤正雄、佐々木悦正、佐々木裕、沢田 哲、志田、品川睦生、清水朋子、瀬賀勝人、高嶋則子、高橋良直、武田千恵子、武沢和義・佐知子、田辺 至、谷口 栄・峰子、谷口勇五郎、田村 稔、徳田恵美、戸津高保、原 冴子、原 実保、原田功雄、広木朋子、本間、中川清志、中正憲信・弘子、浪田良三、成澤里美、西根昭吉・紀子、野坂英三、山田良造、山口和夫、吉田慶子、吉田 隆・幸子、真壁スズ子、松原寛直、村上茂夫 以上 60名

【担当幹事】後藤義民、成澤里美

### 早朝探鳥会に参加して(千歳川)

2003. 5. 11 本 田 優 子

5月11日午前5時。早朝の千歳川河畔は、草花にうっすらと白い霜が降っていて、着込んできたはずなのに、それでも寒い。いつもだったら温かい毛布にくるまって、ぐっすり眠っている時間だ。寒さと眠さでクラクラしながら会場につくと、予想外に多くの人たちが集まっていて驚いた。

私が探鳥会に参加するのはこれが初めて。普段、街中で鳥の声は聞いているはずなのに、森の静けさの中では軽やかな鳥の音が、かつて聞いたこともないほど響いて聞こえる。その声に聞きほれていると、みなが一斉に「いた！いた！見てごらん」と双眼鏡をのぞきながら教えてくれた。私も必死になって双眼鏡をのぞくが、鳥の影さえ見つけることができない。結局スコープをのぞかせてもらって、やっと見ることができたのはクロツグミだった。思わず「かわいい!!」と叫んでしまう。お腹にぼつぼつと見える斑点模様。目をくりくりさせながら、首をかしげる姿はなんとも言えず愛らしい。

これまでは鳥の飛ぶ姿を見ても黒い固まり。それこそハトやカラス、スズメくらいの区別はつくが、後はまったくわからない状態だったが、拡大された鳥たちがこんなにもカラフルで、いろいろな模様があることに驚いた。何よりも札幌からそんなに離れていない場所に、こんなに多くの種類の鳥たちがいるとは思ってなかった。

ようやく自力で双眼鏡で見ることができるようには、すっかりと目が覚め、寒さも気にならなくなっていた。時の経つのがあっという間だった。貴重なヤマセミにも会えたし、オジロビタキ(結局はちがったようだが)かどうかで盛り

上がり、「同じ鳥を見た」という不思議な一体感を味わうこともできた。初めて参加する人でも快く迎え入れ、みんな鳥を楽しむという会のスタンスが素晴らしいと思った。またぜひ参加したい。

〒064-0954 札幌市中央区宮の森4条4丁目3-12-403

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オシドリ、マガモ、キンクロハジロ、イソシギ、キジバト、ツツドリ、ヤマセミ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ミソサザイ、コルリ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キクイタダキ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、クロジ、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、ニュウナイスズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 47種

(注)鳥合わせの時にオジロビタキの名が上がりましたが、後の検討によりキビタキの可能性が高いと判断されたため、リストには載せませんでした。

【参加者】池田みちえ、石田典也、今村浩史、太田清美、岡田幹夫、川東保憲、川村信子、北村 覚、栗林宏三、小山久一、小松信子、斉藤ゆみ子、品川睦生、清水朋子、鳥田芳郎・陽子、白澤昌彦、高栗 勇、高橋利道、田中哲郎、田中洋子、中馬秀普、道場 優・信子、登野泰信、中正憲信・弘子、成澤里美、原 芳明、堀川恵子、本田優子、山内 昴、山形裕規、山口和夫、山下和子、吉田慶子、水谷正弘、渡辺吉宗・好子 以上 39名

【担当幹事】栗林宏三、岡田幹夫

### シギ・チドリを求めて鶴川へ

2003. 5. 18 原 芳 明

ヒトは生まれてから幾年かたち、子供心にも物心がつくとよく言います。僕はこの会に入ってみて、大人になっても人には鳥心がつくのではないかとこのことを考えるようになりました。

一人で鳥を見るようになって1年近く。地方に出かけることも多く、それなりに鳥はいろいろ見ることもできましたが、鳴き声はじめ、鳥の見出し方・識別などに一人では限界を感じていました。

昨年暮れに伏古公園で出会った栗林さんの薦めや、ナチュラリーで知り合った萩野さんに聞いて、3月24日のウトナイ湖から参加し、入会することにしました。事前にいただいた会報の内容や、聞いた様子からも、野鳥の事がいろいろ話し合える人達の集まりであることが、期待できたからです。

ウトナイ湖にしてみると、まだ氷結していて小さな水

域の、少ない鳥にもかかわらず、老若男女ワイワイと子供のようにしゃぎ、大いに盛り上がって識別している姿に、なんとと言う人達の集まりだろうという驚き・あきれると共に、そうなんだ鳥はすべからず識別なのだというあらためて思い知ったのでした。

今まで僕はほとんど見る事がなかったシギ・チドリを、思いっきり見ることができると期待していった鶴川では、残念ながらもう大部分のシギ・チドリは北に飛んで行ってしまった後なのか、数は多くありませんでした。それでもオオソリハシシギを見つけたり、海上のオオハムやウミガラスなどを見出すところなど、やはり探鳥会には必ず盛り上がりがある、という期待を裏切らないものでした。

鳥が必ず、渡りやねぐらで、群れを形成し安全確保や情報交換に努めると同じように、人もその鳥を見出すために、鳥と同じように群れになって行動し、目と聴覚を集めて鳥の発見に努め情報を交換して次に活動するのが、探鳥会の役割ではないかと感じています。

鳥の好みそうな環境に気を使い、おいしそうな木の実、虫や花や木の種類を、ツグミのように見極める。常に小鳥はいないかと林床・梢・電線などに目を配り、必ずタカの目の双眼鏡を携帯し、種別を確認しないと落ち着かない。小鳥のちょっとした声・動きにもフクロウのように見逃さず敏感に反応してしまう。どうもこの会の人にはそうした鳥心がついてしまった大人達のように、すでに僕もその鳥見心に深く染まってしまっている自覚があります。

しなしながらそうした純真な鳥心以上に、ヒトはもっと見たい・もっとも撮りたいという底知れないヒト鳥見欲望に侵されがちです。それが貴重な鳥たちの生存を、いかに脅かしているのかということ、常に自覚する必要があるのではないのでしょうか。

自分の行動が鳥に影響を与えていないか、と細心の注意をはらって観察させていただき気持ちを持つのが、本当の鳥心であり野鳥愛護会の命名の趣旨ではないのかと、僭越ながら、今までの自分の行動をかえりみても、反省しきりの今日この頃です。

いずれにしても、期待のシギ・チドリを始め、これからもっと鳥たちの生態を学び、観察させていただきたい、まだ出会っていない多くの野鳥たちに、期待がいっぱいです。鳥心に始まって花心・木心・虫心など多くの大自然の声に心を傾けられるヒトになれば、まだまだ狭い自分の世界は、もっとも鳥瞰図のように広がっていくことと信じています。

ヒトは鳥を見に行く时必须りそこで人に会い、その人から鳥のことを学ばしていただくと、また鳥に会えるというのが、この会に入って学んだ何よりの教訓です。よい人に出会え、よい鳥に会える、よい会に入れたことを心から感謝しております。これからもお騒がせするかもしれませんが、

よろしくご指導のほどお願い申し上げます。

〒007-0868 札幌市東区伏古8条3丁目2-35

【記録された鳥】アビ、ウミウ、アオサギ、トビ、コガモ、カルガモ、クロガモ、ピロードキンクロ、ウミアイサ、コチドリ、シロチドリ、チュウシャクシギ、イソシギ、キアシシギ、オオジシギ、トウネン、ウミネコ、カモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ユリカモメ、ミツユビカモメ、ウミガラス、ケイマフリ、キジバト、アリスイ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト、オオハム、ワシカモメ、小型ウミスズメ類sp. 以上 41種

(注)鳥合わせの時にマダラウミスズメとしたものについては、ウミスズメの可能性もあるため、「小型ウミスズメ類sp.」としました。

【参加者】板田孝弘、大塚永利子、太田清美、岡田幹夫、萩野裕子、小山内恵子、門村徳男、川東保憲、岸谷美恵子、小堀煌治、佐藤幸典、品川睦生、島田芳郎・陽子、田中哲郎、道場 優、戸津高保、中正憲佑・弘子、成澤里美、原芳明、樋口孝城、藤谷節子、松原寛直・敏子、道川富美子、村上トヨ、山形裕規、山田良造、山本和昭 以上 30名

【担当幹事】樋口孝城、道川富美子

## 野幌森林公園探鳥会

2003. 5. 25

【記録された鳥】アオサギ、トビ、マガモ、キジバト、アオバト、ツツドリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、コルリ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ニューナイスズメ、カケス、ハシブトガラス 以上 34種

【参加者】青山洋子、赤沼礼子、稲垣敦之、井上公雄・則子、今村三枝子、氏家正毅、大阪紹子、大阪博記、男澤晃陽・利通・ななみ・美穂、蒲澤鉄太郎、河端正晴、川村宣子、熊倉澄子、小菅久恵、後藤義民、小西美美枝、沢田哲、菅野秀子、菅間キミ子、菅間慧一、瀬賀勝人・弘子、高橋利道、田村彰俊、田村浩司、近久喜枝、千葉久子、徳田恵美・和美、戸津高保・以知子、長尾由美子、中正憲佑・弘子、二川敏幸、西村智博、西村博伸、野坂英三、信田洋子、長谷部宗吉、畑 正輔、原 美保、原 冴子、原田功雄、広木朋子、堀 さち子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、三浦とも子、水上砂恵子、村田静穂、山口和夫、山本和昭 以上 58名

【担当幹事】中正憲佑、戸津高保

## 植苗探鳥会

2003. 6. 1 竹内 強

昨日の天気予報通り、起きると雨模様である。1年ぶりの探鳥会というのに、そう言えば、去年の探鳥会も雨混じりだった。戸津さんは今年も孫の運動会で来れないといていた。この雨なら、運動会も中止だろう。祖父ちゃんは大変だ。と思いつつ、36号線を走っていると、凄まじい降り、「この雨なら、挨拶して、ご苦労様かな。」と、ふと思う。

30分前に到着すると、もう何人かの熱心な人が挨拶を交わしている。そう言えば、雨で中止になったという記憶は、ほとんどない。長靴、傘、レインコートと、準備も万端で集まってくる。総勢約20名、「幹事の日頃の行いが悪いかから2年連続で雨なのかな。」という声に、「そうですね、探鳥会より、孫の運動会を優先した戸津さんの行いかなど。」といいながら、雨の中、和気あいあいと始まる。

植苗は、集合場所の駅前から、道路わきの林をみながら、ウトナイ湖畔の草原へ向かうという探鳥コースで、林の鳥も、草原の鳥も、水辺の鳥も見ることができる贅沢なコース。

モズやコムクドリから始まり、シジュウカラ、ヒガラのカラ類、エゾムシクイ、センダイムシクイ、ウグイスのムシクイ類の声が聞こえる。道路わきから草原への道にはいると、道ばたは、小さな野草の宝庫、何人かの方たちが、花の名前を教えてください。この季節ならではの楽しさ。花を観察しようと道を少しそれたところで、バサッと大きな羽音、ヤマシギがさっと飛んだ。これも今日の目玉の一つに数える。

草原に出るが、雨は止まず。声はすれども、姿は見えず。コヨシキリ、ホオアカ、ノビタキ、オオジュリンと確認するも、楽しみにしている、シマアオジ、ノゴマが見えない。みんな耳を澄まし、探している。「あっ、この声はノゴマです。」、遠くで声だけが聞こえる。どこか低いところで囀っているようだ。何とか姿が見たい。耳を澄まし、目を皿のようにして低い灌木の辺りを見回す。「あっ、いた。」灌木の間から、ノゴマの喉のオレンジが見える。でも、大きな声で叫んだものだから、すぐ下がってしまう。参加者の皆さん、すいません。

でも、ノゴマを見てしまうと、次はシマアオジの番と意気込むも、結果的には今年は見ることができず。これも、幹事の力不足か、日頃の行いの悪さか。雨の中をとぼとぼと植苗駅前で戻って鳥合わせ。44種という多さにちょっとだけ、ほっ。昨年はシマアオジ、今年はノゴマ、来年は二つとも見られるように、行いを正して頑張ろうと思う。

是非、今年の雨にめげず、来年も参加してください。

〒004-0845 札幌市清田区清田5-1-2-7

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オオタカ、コブハクチョウ、マガモ、キンクロハジロ、ヤマシギ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、コゲラ、アカゲラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、ヒガラ、シジュウカラ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニヒワ、ニューナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上 44種

【参加者】池田みちえ、板田孝弘、岩崎孝博、氏家正毅、岡田幹夫、萩野裕子、後藤義民、島田芳郎・陽子、高橋良直、竹内 強、道場 優、中正憲信・弘子、樋口孝城、松原寛直、山口和夫、横山加奈子、村田静穂 以上 19名

【担当幹事】竹内 強、松原寛直

## 大沼一泊探鳥会に参加して

2003. 6.7・8 池田 みちえ

すがすがしい新緑と、残雪を頂いた美しい羊蹄山を眺めながら一路、歌才へ。歌才では車を止めた向こう、100mは離れてはいなかったと思われる目の前の断崖に、おびただしい数のショウドウツバメが巣を造り凄まじい速さでビュンビュン飛び交っている。間近でこれほどのコロニーを見たのは初めてで、この後も、もっと増えていくと言うのだからどんな光景になるのか興味のあるところである。又この後少し移動した先で目にしたハチクマの翼の美しかった事。なかなか目にすることが出来ないものに会えるのも愛護会ならではの探鳥の楽しみ。

次に静狩湿原へ。こちらも草原の鳥達が、それはそれは賑やかに囀り姿も本当に良く観察出来て楽しかった。それでも案内して下さった菊池さんのお話では気温が低く寒いと抱卵等で下草に入り揚がって来ないので今日は少ないとのこと。かすかに哀調のある囀りを耳にしたのは空耳か？シマアオジの??? 当初、大沼だけをイメージしていた一泊探鳥会、過去を振り返ればどの探鳥会も目的地まで少しの無駄もない行程で楽しませて頂きました。今回この静狩湿原での観察も大変楽しく立ち去りがたいものがありました。次の観察地砂原へ。砂原はこの日、風も強く寒い日でカモメ、ノビタキ等観察の後大沼へ。明朝観察予定のクマゲラ、アカショウビンの観察スポットを下見の後、お宿へ。夕食後、菊池さんから道南は全道の十分の一の面積でありながら熊は全道の三分の一も生息している事、熊がクマゲラの巣に近寄ると熊を威嚇して騒ぐ事等々面白くためになる鳥談義を尽きることなく聞かせて頂き楽しかった。翌朝早く他の参加者より一足先に数人でアカショウビンの



1 泊探鳥会集合写真

観察へ。待つ事しばし、あのキョロロンという特徴のある声が二声三声、確かに聴こえたノしかし姿は…残念ノ朝食後再度観察に向うが、この時、森木立のなか警戒し、人の立ち去るのをジット息を潜め窺っているだろうアカショウビンの事を思うと可哀相で心が少し痛んだ。観察するのに難しい鳥かもしれないが、いつの日かきっと遭わせてもらえる“きっと”そう信じ先への楽しみとする。最後、七飯、大野町へまたがる、きじひき高原でアオジ、ノビタキ、ベニマシコ等草原の鳥達と同じ、爽やかな空気をいっぱい吸って帰路へ。地球環境の破壊が様々に問いかけてくるなか、鳥それぞれ好んで集う環境を知り、保護していく事で、四季のめぐりと共に、共にこの地球に生きる生物として、絶えることなく、生き続け、楽しませてほしいものだと、強く願っております。この探鳥会を準備、お世話下さった幹事さんのご苦労に心から感謝します。

〒050-0083 室蘭市東町4丁目15-10-203

【記録された鳥(2日間の記録)】アオサギ、トビ、ハチクマ、オシドリ、マガモ、カルガモ、オオジシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、キジバト、アオバト、カッコウ、ツツドリ、ホトトギス、アカショウビン、コゲラ、アカゲラ、クマガラ、ヤマゲラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、コルリ、ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、コヨシキリ、メボソムシクイ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、ホオジロ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、ニューナイスズメ、コムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上 53種

【参加者】赤沼礼子、池田みちえ、石井幸子、石橋和子、板田孝弘、井上公雄・則子、今泉秀吉、岩崎孝博、氏家正毅、内山正裕、大町欽子、岡田幹夫、萩野裕子、片山実・慶子、蒲澤鉄太郎・則子、亀井厚子、小堀焔治、坂口、佐藤典子、信田洋子、品川睦生、高田芳郎・陽子、清水朋子、

高栗 勇、田中志司子、徳田恵美、戸津高保・以知子、中正憲倍・弘子、長尾由美子、原 美保、原 芳明、広木朋子、松原寛直・敏子、村田静穂、山口和夫、山田良造、山本昌子、吉田慶子、横山加奈子

以上 46名

【担当幹事】蒲澤鉄太郎、清水朋子、村田静穂、戸津高保

## 平和の滝(夜の探鳥会)

2003. 6. 14 氏家正毅

ほんの3週間前に愛護会に入会させて頂き、野幌森林公園、植苗、大沼に続いて今回の平和の滝が4度目の探鳥会でした。バードウォッチングは全くの初心者ですが身近な所で生きる鳥達の懸命な姿に心を惹かれ、すっかりハマってしまい、連続しての参加です。

今回の平和の滝は自宅から車で5分程度の所。すぐ近くの森でしかも夜にどんな鳥に出会えるのか、わくわくしながら参加しました。夜にもかかわらず大勢の人達が参加しており、皆さんの鳥好きにはいつもながら感心させられます。

PM7時前、まだ辺りが明るい中、山道を平和の滝へ向かってスタート。左手に沢の流れを聞きながら砂利道を登っていくと、時折鳥の鳴く声が聞こえてきます。薄暗くて視界がきかない分、水の音や鳥の音が鮮明に聞こえ、それが大変心地良く感じられました。

しばらく山道を登った所で、小さな空き地に腰を降ろし日が暮れるのを待ちます。あたりがすっかり暗くなりガスがたち込めるなか、沢の方から「ブッポウソウ、ブッポウソウ」とコノハズクの鳴く声が。手元の図鑑で調べると大きさわずか20cm。この暗闇のどこかで、こじんまりと木に止まって鳴いている姿を想像するとなんだか楽しくなってきます。しばらくすると反対側の林から今度は「ホウ、ホウ」とアオバズクの鳴声が。アオバズクはこの探鳥会では初確認という事で、とてもラッキーとのこと。今度はぜひ、昼間にも出会ってみたいです。

しばらく鳥の声に耳を傾けているうちにあいにくの霧雨が降り始め下山。毎年聞かれるというヨタカの鳴声は今回は残念ながら聞く事ができませんでした。ほんの1時間あまりでしたが、豊かな時間を過ごす事ができました。

毎回、探鳥会に参加するたびに、私達のすぐ身の周りで行われる命の営みを改めて認識させられます。

私達人間は、毎日の生活の中でつい他の生き物の存在を忘れて自己中心にふるまってしまうがちですが、できる限り周りの命に思いをはせながら日々の暮らしていきたいものです。

〒063-0038 札幌市西区西野8条2丁目12-20-106

【記録された鳥】アオサギ、コノハズク、アオバズク、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、コルリ、マミジロ、クロツグミ、ヤブサメ、センダイムシクイ、キビタキ、オ

オルリ、アオジ、ハシブトガラス 以上 15種

【参加者】井上公雄、岩崎孝博、氏家正毅、岡田幹夫、加藤千春、川東保憲・知子、栗林宏三、鈴木順子、鈴木幸弥、鈴木耀介、西垂義治、清水朋子、島田芳郎・陽子、高橋良直、戸津高保・以知子、長尾由美子、中正憲信、広木朋子、原 芳明、皆川昌人 以上 23名

【担当幹事】井上公雄、栗林宏三

## 東米里探鳥会

2003. 6. 15 渡 辺 紀久雄

鳥を見ることにすっかりご無沙汰となっているここ数年ですが、年に一回のお役目(当番幹事)で私が唯一訪れている探鳥地がこの東米里探鳥会です。

以前私がオオジュリンの繁殖期の生態を観察し、頻繁に通っていた調査地がこの地域であり、今はすっかり資材置場などで土を埋め立てられ、ところどころ残る草原にかつての面影が残っています。

私が観察を始めた20年前は、原野部分が多く、建物は少なく、道路に電柱もなく(電気がきていなかった)、道路も今のように歩道は整備されていませんでした。家が少ないので、調査地でスズメも見ることがなく、観察を始めて何年かしてから初めて見たように記憶しています。

冬に訪れた時は、道路に除雪が入っていないため車を埋まらせて、大変苦労したこともありました。

ここで愛護会が探鳥会を行うようになったのは、昭和59年からで今年は丁度20回目となったようです。

前置きが長くなりましたが、この日は大変天気が良く、解散する昼頃には暑いくらいの日でした。

この日の主な鳥は、スタート地点(東米里小中学校)のそばの堀にいた5羽の雛を連れたマガモの親子、毎年同じ場所に現われるコチドリ(2羽いました)、市内ではすっかり少なくなった札幌市の鳥カッコウ、終了の頃に近い距離ではっきりと見ることできたアリスイ(後ろの位置で歩いたのが結果的に幸運でした、デジカメでしっかり証拠写真を撮られた方もいました)などでした。

メインの草原の鳥は、ノビタキ、ホオアカ、オオヨシキリ(姿もはっきり)などが見られましたが、以前見られたノゴマヤ、あれほどいたオオジュリンも今年はほとんど見られませんでした。

開発が進み、とり残された草原で生きている鳥たち、この日見た鳥の多くは繁殖のためにわざわざこの土地に来ているのです。鳥が少なくなっていく要因の多くが人間によるものと思われる以上、彼らに対してやらなければならないこともたくさんあるように思います。

〒004-0880 札幌市清田区平岡10条1丁目21-8

【記録された鳥】アオサギ、トビ、チゴハヤブサ、マガモ、

コチドリ、キジバト、カッコウ、アリスイ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、シメ、ニュウナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシブトガラス、ドバト

以上 27種

【参加者】赤沼礼子、石田典也、板田孝弘、井上公雄・則子、今村三枝子、岩崎孝博、氏家正毅、荻野裕子、岡田幹夫、蒲澤鉄太郎・則子、栗林宏三、小西美美枝、清水朋子、島田芳郎・陽子、高栗 勇、高橋利道、戸津高保・以知子、原 芳明、広木朋子、広田、松原寛直・敏子、山形裕規、山口和夫、吉田慶子、渡辺紀久雄 以上 30名

【担当幹事】渡辺紀久雄、栗林宏三

## 野幌森林公園探鳥会

2003. 6. 22

【記録された鳥】トビ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジウカラ、ゴジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 23種

【参加者】赤沼礼子、石田典也、氏家正毅、太田清美、岡田幹夫、蒲澤鉄太郎、亀井厚子、川野辺泰三・葉子、川村宣子、栗林宏三、小泉三雄、後藤義民、小西美美枝、小山久一、今 善三郎、斉藤正雄、島田芳郎・陽子、清水朋子、菅間慧一・キミ子、戸津高保、長岡久美子、長尾由美子、畑 正輔、原 冴子、原 美保、原 芳明、原 竜太、長谷孝一・同夫人、半田孝俊、堀 さち子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、村野道子、山口和夫、山本和昭、横山加奈子 以上 41名

【担当幹事】栗林宏三、島田芳郎

## 福移の探鳥会に参加して

2003. 7. 6 水 上 砂恵子

7月6日、福移の探鳥会に初めて参加しました。環状通東駅からバスに乗り換え、30分ほどで到着です。バス停を降りると、原野と道路があるのみで、集合場所がわからずとまどいましたが、探鳥会に参加するらしい人たちがいたので、ついて行くことにしました。それにしても、とてものかな風景に、札幌にもこういう場所があるんだなあ、と嬉しく思いました。

いつも森林公園の方に参加していて、草原は初めてなので、どんな風に観ていくのかワクワクしていると、「ホオアカ!」とか、早速声が聞こえます。いつもながら、どう

して一瞬でわかるのか、不思議です。でも、「見える！」。森林と違って、草原は枝がないので本当によく見えるのですね。「オー！ジュリン！」と聞き間違えた「オオジュリン」も、頭の黒いのがとっても良く見えるのです。飛びたっても追跡しやすいので、面白いように見えます。調子に乗って、目の前を歩いているヒバリに近付き過ぎて逃げられてしまいました。後ろで見てた人達、ごめんなさい。

さらに会は進んで、河川敷に出ました。水鳥が少ないのが意外でした。周りの人が対岸を見ているので双眼鏡を向けると、カワセミくん！時々動いて、きれいなブルーの羽を見せてくれます。肉眼でも色がわかり、本当に美しくてうっとりしました。ただ、ちょっと視野を広げると、カワセミくんはペットボトルのゴミに囲まれています。餓死している鳥の胃袋から、たくさんのビニール袋やプラスチックが出てくるという話を思い出しました。カワセミくん、お願い、食べないでね！

それにしても、河川敷はゴミがひどく、プリンターや資材ゴミ、驚いた事に、昨日焼肉をした、そのままの状態、生肉や新品の焼きアミまで捨ててありました。札幌市に伝えれば撤去してもらえるのでしょうか……。すごく美しい場所だけに、そこに似つかわしくないゴミの山は、とても残念でした。

河川敷から牧草地の横を通り、キャンプ場につく間にも、小さな鳥をたくさん見ることができ、食事の後はハクセキ

レイが2羽、遊んでいるのを間近で見られて、とても嬉しかったです。でも、自分ではスズメもヒバリも見分けがつけられないのが情けなくなり、もっと勉強するぞ！と、めずらしくやる気が出てきました。みなさん、がんばりますので、ご指導の程、よろしくお願い致します！

〒003-0024 札幌市白石区本郷通7丁目南1-27-202

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、チュウヒ、マガモ、ウズラ、ウミネコ、オオセグロカモメ、キジバト、カッコウ、カワセミ、アカゲラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハソボソガラス、ドバト  
以上 31種

【参加者】赤沼礼子、板田孝弘、井上公雄、今村三枝子、岩崎孝博、後木建一、岡田幹夫、萩野裕子、蒲澤鉄太郎・則子、小堀煌治、品川睦生、信田洋子、島田芳郎・陽子、栖川 巖、瀬賀勝人・弘子、高栗 勇、高嶋則子、高嶋あきひで、高橋成人、高橋利道、高橋良直、田中志司子、道場 優・信子、徳田、戸津高保、中正憲徳・弘子、浜田強、原 美保、原 芳明・竜太、広川淳子、広木朋子、松島雅之、松原寛直・敏子、水上砂恵子、山本和昭、吉田慶子  
以上 43名

【担当幹事】道場 優、岩崎孝博



【野幌森林公園】

2003年10月5日(日)、10月19日(日)、11月2日(日)、12月7日(日)

初秋、晩秋、初冬にかけての探鳥会が続きます。赤や黄色の陽光に輝く紅葉の始まりとともに、夏鳥たち

の姿はほとんど見られなくなり、カラ類やキツツキなどの留鳥たちが主体の観察になります。晩秋、初冬になると木々の葉もなくなり、鳥が見やすくなり、留鳥を主体にツグミ、マヒワなどの冬鳥が見られる季節になります。

集 合＝大沢口駐車場入口 午前9時

交 通＝新札幌駅バスターミナル発

夕鉄バス(文京通西行)大沢公園入口下車

JRバス(文京台循環線)文京台南町下車

各徒歩5分

【宮島沼】 2003年10月12日(日)

春は北へ秋は南へマガンの渡りはこの宮島沼を中継地として繰り返されています。秋はユーラシア大陸の北東地域で夏を過ごし繁殖を終え、9月下旬頃から渡来がはじまりこの時季にピークに達します。春と異なり秋は滞在期間

が短く、休憩をとると順次越冬地を目指して飛び立っていきますので、春ほどの大群にはなりません、それでもピークには2～3万羽になります。他にハクチョウ、カイツブリ、各種カモ類やオオタカ、ハヤブサなどの猛禽類、時にはオグロシギ、ツルシギ、トウネンなどのシギ・チドリ類が観察されることもあります。

集 合＝大富会館うら湖畔側 午前10時

交 通＝岩見沢駅前バスターミナル発「中央バス月形行」大富農協前下車 徒歩約10分

【ウトナイ湖】 2003年11月9日(日)

晩秋のこの時期、澄み渡る冷たい空気、ウトナイの独特な雰囲気を感じる冬の到来が真近かな季節の探鳥会です。岸辺に集まるハクチョウやオナガガモ、湖面を泳ぐヒドリガモ、ヨシガモ、ミコアイサ、カワアイサ、遠くの岸にはマガンやヒシクイが群れ、また、オジロワシ、オオタカ、ハヤブサなども良く見かけられます。寒い季節ですので、防寒には十分に気をつけて参加しましょう。

集 合＝鳥獣保護センター駐車場前 午前9時30分

交 通＝道南バス ウトナイレイクランド下車

## 鳥民だより

### 野鳥写真2種

### ダイシャクシギとブッポウソウ

伊達市在住の会員である篠原盛雄さんから北海道では比較的希な鳥の写真が寄せられましたので掲載します。



ダイシャクシギ

2003年4月27日 長流川河口 撮影者 阿部 賢一氏

ダイシャクシギ：篠原さんと、知人である阿部賢一さん(胆振管内虻田町在住)が、2003年4月27日に長流川河口で観察し、阿部さんが撮影したものです。ダイシャクシギはこれまでにいくつかの地域で記録はあることになっていますが、写真は初めてと思われる。ホウロクシギに比べて全体に色が淡く、また腹部が明らかに白く見えます。飛んだときに腰が白かったことも視認されています。

広報部



ブッポウソウ

2002年5月9日 七飯町 撮影者 石井 孝一氏

ブッポウソウ：前記の阿部さんの知人である石井孝一さん(渡島管内七飯町在住)が2002年5月9日に七飯町で撮影

したものです。ブッポウソウはこれまでに渡島管内も含めて北海道のいくつかの地域で記録はありますが、写真撮影されたのは広報部が把握する限りにおいては、これまでに1992年5月の積丹町のもの(北海道新聞社、北海道の野鳥、2002)だけで、この写真が2例目と思われる。

### 道新野生生物基金のHPで 道内の野鳥を写真と鳴き声で紹介

(財)北海道新聞野生生物基金は北海道新聞社が発行した「北海道の野鳥」を活用して、343種の写真や生態、記録などの解説、115種類の鳴き声を7月からインターネットのHPで公開しています。このデータベースは科や名前の他、例えば「スズメ大」「カラス大」といった大きさからも、また、「夏鳥」「冬鳥」など観察時期からも検索できます。同基金では343種以外に記録された種についても、年に1度くらいの割合で更新し、今後も道内の野鳥記録を充実させるとともに、インターネットの双方向性通信のメリットを活かして、情報の交流の場として生息分布などの情報を収集し、道内の野鳥分布図づくりなども手がけたいと話しています。このデータベースには愛護会会員による写真も多数掲載されています。また、鳴き声はすべて会員の田辺至さんが収録したものです。

アドレスは

<http://jyoho.hokkaido-np.co.jp/wildbird/> です。  
また愛護会HPのリンク集からもアクセスできます。

### \*\*\* 野鳥カレンダーの販売 \*\*\*

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前の入ったカレンダーを販売いたします。印刷予定部数は70部で価格は1部1,200円です。早目にお申し込みください。

お渡しは11月のウトナイ湖と12月の野幌探鳥会になりますので必ずお受取りください。申し込み時に受け取り場所もお知らせ下さい。

申し込み先 戸津 831-8636 (FAXも同じ)  
小堀 591-2836 (FAXも同じ)

### \*\*\* お詫びと訂正 \*\*\*

前号で新会員をご紹介いたしました「畑 正輔」は、「畑 正輔」さんの誤りでした。おわびし、訂正いたします。

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>